

月刊 DRF 2017 年 3 月号 No.86 March, 2017 掲載

今そこにあるオープンアクセス Clear and present Open Access

第 22 回 (最終回) ハゲタカ出版社リストの消滅

Disappearance of the list of predatory publishers

首都大学東京学術情報基盤センター 栗山正光

1 月も半ばを過ぎた頃、ジェフリー・ビール(Jeffrey Beall)のハゲタカ出版社リストがアクセスできなくなっているという[情報](#)が伝わった。日本でも[カレントアウェアネス](#)が取り上げ、彼の[ブログ](#)のコンテンツが何の説明もなくすべて削除されていること、勤務先のコロラド大学デンバー校から、これはビール自身が行ったことで、彼の地位はそのままであるという発表があったこと、キャベルズ([Cabell's International](#))という会社が彼を顧問に迎えて同様のブラックリストを作る予定だったこと、などを紹介している。

恨みを買うことも多い (2013 年にはインドの出版社から 10 億ドルの損害賠償請求を受けたと[報じられた](#)こともある) リストだったので、ハッキングされたとか脅迫を受けたとかの憶測を呼んだ。利用者の間ではキャッシュされたリストがツイッターで出回ったらしい。インターネット・アーカイブで直前の[版](#)が見られるという[指摘](#)もあった。

価値あるサービスだから復活してほしいという[声](#)がある一方、冷ややかな反応も多い。リストが個人的な判断によるもので基準が疑わしいということもあるが、オープンアクセス(OA)をヨーロッパの社会主義者の陰謀だと言ったり、OA 運動を攻撃する[論文](#)を发表或して顰蹙を買ったことが大きい。古くからの OA 擁護者ゲドン([Jean-Claude Guéron](#))などは「いずれにせよビールのリストは役に立たない。誰が気にするんだ?」と切って捨てる。

ブラックリストという形式そのものが良くないという[意見](#)もある。差別的で訴訟を受けやすく、本質的に非倫理的だと言う。この人はホワイトリストの利用を推奨し、パブメド、ウェブ・オブ・サイエンス、スコーパス、DOAJ など、すでに多くの立派なホワイトリストが存在すると指摘する。[ThinkCheckSubmit](#) (考えよ、チェックせよ、投稿せよ) や [QOAM](#) のようなサービス (前者は投稿先を考える上でのチェックリスト、後者はクラウド・ソーシングによる学術雑誌の評価リスト) を使う手もあるが、結局のところ、研究者は自分で投稿先を決定できる能力を持たなければならない、というのが結論である。

ビール自身は沈黙を守っているのだが、彼に接触し、フェイスブックのチャットで[インタビュ](#)した人がある。それによると、キャベルズから正式な話はないし金も受け取っていないと言う。ブログ削除の理由を明かすのは丁重に拒否したが、このままだと彼の仕事は無駄になってしまうのではないかというコメントには、OA 擁護者たちは常に自分を批判し続けてきた、彼らが問題を解決するんじゃないか、と拗ねたような返事をしたそうである。

ところで、この連載も今回で終わりだが、最初の回 (2013 年 7 月の[月刊 DRF42 号](#)) で取り上げたトピックがこのハゲタカ出版社リストだった。当時は Beall の発音がわからず、誤ってベルなどと表記している ([名前発音サイト](#)で調べた結果)。3 年半ほどかけて同じ場所に戻ってきたような既視感を覚えるが、まったくの円ではなく螺旋を描いたのであって、ほんの少しだけかもしれないが、OA 運動は着実に上を向いて進んでいるのだと信じたい。

この間のご愛読を感謝いたします。